

第4章

西部における選挙

太田 仁志

本章ではグジャラート州、マハーラーシュトラ州、パンジャブ州、そしてラージャスターン州の西部4州における第16次連邦下院選挙の結果をまとめる⁽¹⁾。本下院選挙で大勝利を収めたインド人民党(BJP)は、単独で選挙戦に臨んだグジャラート州とラージャスターン州ではすべての議席を押さえる完勝である。シヴ・セナーと同盟を組んだマハーラーシュトラ州でも圧勝であった。それに対してパンジャブ州では、アカリー・ダルとの同盟で13議席中6議席にとどまり、かつ新政権で財務大臣と防衛大臣に就任したBJPの顔ともいえる連邦上院議員のアルン・ジャイトリーが敗れるなど、大苦戦を強いられた。そのパンジャブ州は、2011年に注目を集めた反汚職運動を経て誕生した庶民党(AAP)が唯一議席(4議席)を獲得した州であった。以下、州名アルファベット順に、第16次下院選挙の結果を分析する⁽²⁾。

1. グジャラート州：モディお膝元州でのBJPの完勝

グジャラート州は、今回の連邦下院選挙のBJP大勝利を受けて第15代インド首相に就任したナレンドラ・モディのお膝元・出身州である。氏は首相就任に際して職を辞すまで、同州の州首相を2001年10月から4期にわたり、14年近く務めている。本選挙でのBJPの大勝は、インド有権者のモディ個人に対する期待が主因のひとつである。その意味でBJPのいわば本丸であったグジャラート州での同党の圧勝は、選挙戦いかんにかかわりなく、大方の予想するところであった。実際、BJPは全26議席のすべてを押さえる完勝である。投票日は26選挙区すべて4月30日である。

モディ個人への期待とは、いうまでもなく氏の州政権下にあるグジャラート州の高い経済成長と、それを実現させたと考えられている氏の行動力である。グジャラート州は第2次産業の代表的な拠点州であり、モディは国内外からの製造業への投資を積極的に誘致してきた。氏が州首相になった時期に重なる2000年代最初の10年間のグジャラート州GDP成長率は年率10.5%を記録している。これは製造業の集積がみられ同じく州経済成長率が高いハリヤーナー州の同9.2%や、ハリヤーナー州と同じく日系企業の進出が著しいタミル・ナドゥ州の同8.5%を上回る水準である(Rani 2012)⁽³⁾。モディ政権下のグジャラート州の経済成長をめぐっては賛否もあるが(Sood 2012)、他州と比較して同州が高い経済成長を記録したことだけは疑いない。工業のみならず商業活動の主要拠点でもあるグジャラート州は、経済自由化のもとでインドの経済成長を体現してきた代表的な州であり、それをもたらしたのがモディである、このような氏のイメージのもとにインドの有権者は、本選挙で氏が首相候補としてけん引するBJPに票を投じた、というのが今回の下院選挙の図式である。もちろんこの図式に反汚職政策の不徹底など、中

央レベルでの国民会議派・統一進歩連合(UPA)政権に対する失望や失政も忘れることはできない。

このような動態とイメージとともに、1990年代以降にインドでいっそう顕在化するもうひとつの別の主要な動態、すなわちヒンドゥー・ナショナリズムの高まりを如実に体現したのもグジャラート州である。インド政治において、政党としてヒンドゥー・ナショナリズムを担うのがBJPであり、また、それをグジャラート州で巧みに利用したのがBJPのモディである(広瀬・南埜・井上 2006, 広瀬・北川・三輪 2011)。氏に対しては2002年に発生したコミユナル暴動をめぐる、州首相としての治安維持責任の放棄という嫌疑と批判がついて回るが、少なくともグジャラート州では、それすらも何事もなかったかのごとくものともしない。それほどまでにグジャラート州の政治に色濃いのがヒンドゥー・ナショナリズムである。BJPでもその旗手であり、またグジャラート州に高い経済成長をもたらした実力者というイメージが、モディがおそらくは生来に兼ね備えるカリスマ性を補強していることは間違いない。このようななかで、BJPがグジャラート州で負ける要因は見当たらない。それでも同州でのBJPの大勝利を決定づけるべく、従来から会議派が強いスレンラナガールなどの選挙区にも入るなど、モディ本人が投票日の1週間ほど前からグジャラート州での選挙キャンペーンに積極的に取り組んだ(*The Hindu*, April 23, 2014)。

グジャラート州のヒンドゥー教徒はインド全国平均と比べて1割近く高い9割を占めるが、州の政治はこのヒンドゥー・ナショナリズムと同時に、カースト政治も特徴としてきた。同州の選挙は、基本的にはBJPと会議派の2大政党の対決という色彩が強く、前回2009年と前々回2004年の下院選挙での両党の合計得票率は9割になる。有力な地域政党はなく、共産党系・左翼政党の存在感もない。1970年代まではブラーマンなどの上位カーストやパティダールという中間層の少数派による政治支配が続いたのに対し、1980年代に会議派が採用した選挙をめぐる戦略「KHAM」⁽⁴⁾によって、それらの非多数派の排除が進む。KHAM自体はBJPが台頭する1990年代には破綻するが、その後も政治支配の非「少数派」化、とりわけ非ブラーマン化は確実に進展していく。完勝したBJPの今回の選挙候補の公認をめぐることも、その動向が反映されている。たとえばBJPはこれまで7回当選しているハリン・パタックを公認しなかった⁽⁵⁾。クシャトリヤやヴァイシヤといった上位カーストの政治力の低下も進んでいる(*The Hindu*, March 28, 2014)。ちなみにモディ自身は後進階級の出身である。なお、グジャラート州の指定カースト(SCs——旧不可触民に当たる)の人口比は6.7%、指定部族(STs)は同14.8%(いずれも2011年センサス)で、宗教別にはムスリムが9.1%を占めている(2001年センサス)⁽⁶⁾。

今回の第16次連邦下院総選挙の投票率は63.6%で、全国平均66.4%より低いものの、前回の2009年下院選挙での投票率47.9%と比較すると大幅な増加である。そして今回の選挙はすでに何度か述べているように、26議席すべてをBJPが奪うという完勝であった。政党別の得票率をみると、BJPは59.1%、会議派は32.9%、国民会議党(IND)が2.1%、そして庶民党が1.2%で、1%以上の得票率を記録したのはこの4政党のみである。

表4.1は2000年以降の下院選挙におけるBJPと会議派の獲得議席数および得票率をまとめている。BJPは得票率で前回2009年および前々回2004年の下院選挙に比べて10%ポイント以上も伸ばしている。それに対して会議派は10%ポイント以上のマイナスである。会議派を中心とするUNPが中央政権を担う結果となった前回と前々回の選挙では、BJPはグジャラート州では勝利を収めはしたが、BJPと会議派はとりわけ得票率では接戦を繰り返していた。したがって、今選挙での両政党の得票率の差は前回・前々回の下院選挙とは対照的である。もっとも、1990年代以降の第10次下院選挙からのBJPの獲

得議席数および得票率（後者は括弧内）は、1991年・第10次下院選挙が20議席（50.2%）、1996年・第11次選挙が16議席（48.5%）、1998年・第12次選挙が19議席（48.3%）、1999年・第13次選挙が20議席（52.5%）であった（広瀬・南埜・井上 2006）。1990年代以降の下院選挙におけるグジャラート州はこのようにBJPの票田であり、むしろ前回および前々回が同州では例外的な結果であったとみることができる。

モディ自身はヒンドゥー教の聖地であるウッタル・プラデーシュ州のヴァラナシーとグジャラート州のバドダラから立候補している。当選後に辞退したバドダラ選挙区ではモディの得票率は72.8%で、次点候補者に57万票以上の差をつけた圧勝であった。この得票差はグジャラート州では最大で、得票率もスタートで当選したダルシャナ・ヴィクラム・ジャルドシュの75.8%に次ぐ。今回は26選挙区すべてにおいてBJP候補者が50%以上の得票率を獲得するという、議席数でも各選挙区での得票率でも、BJPの完封勝利であった。

表4.1 グジャラート州の連邦下院総選挙の結果

政党名	第16回連邦下院選挙(2014年)		第15回連邦下院選挙(2009年)		第14回連邦下院選挙(2004年)	
	議席数	得票率(%)	議席数	得票率(%)	議席数	得票率(%)
インド人民党(BJP)	26	59.1%	15	46.5%	14	47.4%
国会会議派	0	32.9%	11	43.4%	12	43.9%

(出所) Election Commission of India ウェブサイト(2014年5月20日閲覧)、広瀬ほか編著(2006)、広瀬ほか編著(2011)

なお、グジャラート州では今回が初めての投票となる年齢層18～22歳の有権者、および23～25歳の有権者の投票率は順に69%、74%で、同州全体の投票率63.6%を上回っている。BJPの得票率は59.1%であったが、18～22歳の有権者からの得票率は49%とかなり低く、他方、23～25歳の年齢層および中間年齢層の有権者から得票率が高い(*The Hindu*, May 28, 2014)⁽⁷⁾。また、BJPはグジャラート州ではその他後進階級(OBCs)からの得票を多く得ており(*The Hindu*, June 1, 2014)⁽⁸⁾、またSCsの票も会議派ではなくBJPに流れている(*The Hindu*, June 6, 2014)⁽⁹⁾。STsの票は前回2009年の下院選挙では会議派の圧勝だったが、今回は一転して両政党が競り合うなど(*The Hindu*, June 10, 2014)⁽¹⁰⁾、BJPの勢いをみせつける選挙結果であった。

2. マハーラーシュトラ州：会議派連合への批判、追い風に乗るBJP大同盟の大勝利

インド諸州で最大の経済規模を誇るマハーラーシュトラ州の連邦下院選挙は、BJPおよびシヴ・セナーのサフラン同盟と、会議派およびナショナリスト会議派党(NCP)の会議派連合、という対決構図が続いている。後掲表4.2にあるように、2004年第14次下院選挙ではBJP-シヴ・セナーの同盟が、前回2009年の第15次選挙では会議派-NCPの連合が勝利を収めている。そして今回2014年第16次下院選挙ではBJPとその同盟が42議席、会議派連合が6議席というBJP側の圧勝であった。なお、マハーラーシュトラ州にはウッタル・プラデーシュ州の80議席に次ぐ全48議席が割り当てられており、投票は4月10日に10選挙区、17日と24日に各19選挙区の3回にわたって実施された。しかし4月24日の第3次投票日に、ムンバイおよび近郊の投票予定の有権者20万人以上の氏名が投票者リストから削

除されていたという失態が生じてしまった⁽¹¹⁾。また選挙戦では、NCP 党首で現職の連邦政府農業大臣でもあった上院議員シャラード・パワーのマハーラーシュトラ州での発言に対し、インド選挙委員会からの警告が与えられている⁽¹²⁾。

マハーラーシュトラ州では下院選挙に候補者を擁立する政党は少なくないが、今選挙で BJP はシヴ・セナーのほか、インド共和党(アタヴァレ派)、また 2014 年 1 月に同盟に加わった地域政党である自愛党・自愛農民組合(SSS)⁽¹³⁾と全国社会党の 5 政党で「マハユテ」(大同盟)を結成している。マハーラーシュトラ州は前節のグジャラート州と同様、ヒンドゥー・ナショナリズムの強い州である。そのなかにあって地元「マラーティ」のアイデンティティを強硬に重視するシヴ・セナーは、BJP とともに 1995 年の州議会選挙で勝利し、1999 年までのあいだ、ふたりの州首相を輩出している。しかしシヴ・セナーは 2006 年に分裂し、シヴ・セナーを離れたマハーラーシュトラ・ナヴニルマン・セナー(MNS)が結成された。MNS は前回 2009 年の下院選挙では議席獲得はならなかったものの、健闘したという評価がなされている(小川 2011)。シヴ・セナーでは 2014 年の下院選挙を控えた 2013 年末より離反者が相次ぎ、対立する会議派・NCP や MNS に鞍替えする事態が相次いだ。BJP が選挙戦をめざして勢いを強める一方で、シヴ・セナーはこのように選挙を前に再び党結束の乱れを露呈した。

他方、会議派は 1999 年から州政権を担うが、会議派連合も昨今は批判にさらされている。たとえば退役軍人と未亡人のために建設されたアパートをめぐるアダルシュ・ハウジング汚職事件への関与から、今回初めて下院選挙に立候補した前州首相のアショーク・チャヴァンは 2010 年に州首相の辞任を余儀なくされるなど、州連立与党には中央レベルと同様に、有権者から汚職をめぐる厳しい視線が向けられている。この辞任により新たに州首相になった現職のプリトヴィラジ・チャヴァンは今回、アショーク・チャヴァンの党公認に反対したことから、党内不和も伝えられている。さらにインド全体にいきわたった選挙前の反会議派・UPA 政権への逆風は、マハーラーシュトラ州でも止むことはなかった。モディも 4 月下旬にムンバイで、高まる若年層の失業をはじめとする州政権与党の批判だけでなく、中央政権レベルでの会議派批判を繰り返している(*The Hindu*, April 23, 2014)。

また、初の国政選挙に挑んだ庶民党はマハーラーシュトラ州の全 48 選挙区で候補者を擁立し、注目を集めた。これに対して BJP および会議派のいずれとも組まない、左翼・地域政党を中心とする政党連合も候補者を擁立したものの、存在感を示せなかった。ちなみに選挙結果のみからみれば上記のような党勢対立軸は明瞭だが、マハーラーシュトラ州では無所属候補者が多いのも特徴である。たとえば BJP の大物政治家ゴピナス・ムンデが過半数の 51.6% の得票率で当選を果たした選挙区ビードでは、39 名もの候補者がおり、うち 26 名が無所属での立候補である。

今回の下院選挙でのマハーラーシュトラ州での投票率は 60.7% で、インド全体の 66.4% よりもかなり低い。前回 2009 年下院選挙の 51.0% に比較すると大幅に投票率が伸びている。表 4.2 はマハーラーシュトラ州の下院選挙の結果をまとめたものである。BJP が 23 議席、シヴ・セナーが 18 議席、また両党と大同盟を結んだ自愛党の党首ラジュ・シェティが 2 期続けてハトゥカナングル選挙区を押さえるという、BJP 側が 42 議席獲得という圧勝であった。残りの 6 議席は会議派連合であるが、会議派自身はわずか 2 議席と、前回の 17 議席から大幅に議席数を減らす大敗を喫した。NCP も前回の 8 議席から半減させ、4 議席のみとなった。注目された庶民党、また MNS は議席獲得がならなかったばかりか、足元にも及ばなかった。本下院選挙の結果はモディへの支持、また会議派と NCP による州政権与党の不人気と、有権者の強い反 UPA の感情が、BJP とシヴ・セナー同盟を勝利に導いたものである(Chidambaram

2014)。ムンバイの全 6 議席は BJP 同盟が獲得している。BJP は選挙戦ではモディ旋風に確実に乗るべく、コールセンターを設けたり 3 万人以上の活動員を動員したりするなど(*The Hindu*, March 20, 2014)、強力で粘り強く戦い抜いたことも功を奏している。また BJP が組んだ大同盟は、都市部だけでなく農民や SCs の有権者をも射程に入れるものであった(前者が自愛党・SSS, 後者がインド共和党[アタヴァレ派])。また大同盟は、OBCs および STs からの得票も大きく得ている⁽¹⁴⁾。ちなみにマハーラーシュトラ州の SCs の人口比は 11.8%, STs は同 9.4%を占め、宗教別にはヒンドゥー教徒が 8 割、ムスリムが 1 割となっている(2001 年)。

表4.2 マハーラーシュトラ州の連邦下院総選挙の結果

政党名	第16回連邦下院選挙(2014年)		第15回連邦下院選挙(2009年)		第14回連邦下院選挙(2004年)	
	議席数	得票率(%)	議席数	得票率(%)	議席数	得票率(%)
インド人民党(BJP)	23	27.3%	9	18.2%	13	22.6%
国民会議派	2	18.1%	17	19.6%	13	23.8%
ナショナリスト会議派党(NCP)	4	16.0%	8	19.3%	9	18.3%
シヴ・セナー	18	20.6%	11	17.0%	12	20.1%
自愛党	1	2.3%	1	1.3%	-	-

(出所) 表4.1に同じ。

(注) 第14回連邦下院選挙ではこのほかに、インド共和党からの当選者が1名、また第15次選挙では多数派開発戦線と無所属から各1名が当選を果たしている。

BJP は全 48 選挙区のうち 24 議席で候補者を擁立し、ナンデド選挙区の 1 名を除く 23 名が当選している。シヴ・セナーは 20 名を擁立し 18 議席を確保した。会議派ではソラプールから立候補したスルクマル・シンデ内務大臣、ムンバイ選出の現職であるミリンド・デオラおよびプリア・ダット、また連邦政府重工業・公企業大臣のプラフル・パテルなどの大物が軒並み敗れ去った。そのなかにあつて前州首相のアショク・チャヴァンはダンドドから当選を果たしている。会議派が確保したわずか 2 議席の一方を押さえた当事者であるアショク・チャヴァンは、選挙結果を受けて会議派の現職州首相のプリトヴィラジ・チャヴァン批判を強めている。

各党の得票率をみると、BJP は前回から 9%ポイント上乘せし、単独で 27.3%を獲得した。またシヴ・セナーと自愛党を合わせて国民民主連合(NDA)政権は過半数の得票率である。これに対して会議派は前回から 15 議席も失ったにもかかわらず、得票率はわずか 1.5%ポイントしか減じていない。NCP についても議席数の喪失ほどに得票率は減っていない。BJP の圧勝は小選挙区制のなす業と考えたいところだが、それでも他方で、大多数の選挙区で 10 人以上の候補者が乱立するなか、全 48 議席のうち当選者の得票率が 5 割を下回るのは 15 選挙区のみで、45%の得票率を得ずに当選したのはそのうちわずか 3 選挙区しかなかった⁽¹⁵⁾。また、BJP の当選者 23 名のうち、過半数の得票率を確保できなかったのも 3 名のみである。今選挙で最大の得票率 70.1%を挙げたのも北ムンバイ選出の BJP ゴーパル・チナイヤ・シェッティである。

なお後日談として、連邦政府新閣僚配分において、シヴ・セナー所属のアナント・ギーテが重工業大臣に任命されたことに対し、シヴ・セナーがマハーラーシュトラ州で 18 議席を獲得したことを考えれば、より格上の大臣ポストが割り当てられるべきであると、不満を表明した。最終的にはモディが自らとりなし、内閣改造時にはシヴ・セナーにより高いプロフィールの大臣ポストを約束したと伝えら

れている(*The Hindu*, June 20, 2014; June 22, 2014)。また、これまでに何度か名前を挙げた BJP の大物政治家ゴピナス・ムンデが連邦政府で農村開発大臣として初入閣を果たしたのち、ニュー・デリーで 6 月 3 日に交通事故にあって亡くなるという悲劇に見舞われた。ムンデは同じくマハーラーシュトラ州選出で 2010 年から 3 年間、BJP の党首を務めたニティン・ガドカリよりも地元での人望が厚く、本年 10 月にも予定されている州議会選挙を迎える BJP にとってムンデの喪失は計り知れないとの指摘がある(*The Hindu*, June 6, 2014)。

今回の下院選挙での大勝利を受け、BJP 同盟は会議派連合が率いる州政府の総辞職を当然のこととして求めている。人望厚い BJP のムンデの喪失ということはあるにせよ、年内のマハーラーシュトラ州の州議会選挙では、15 年の長きにわたり政権を維持してきた会議派・NCP 連合への雲行きがきわめて怪しくなっている。本連邦下院選挙はこのことを改めて示す結果であった。

3. パンジャブ州：庶民党の大健闘、かろうじて面目を保ったアカリー・ダル・BJP 州政権連合

パンジャブ州はその人口構成において、他州とは異なる際立った特性をもつ。すなわち、州人口の 6 割がシク教徒であること⁽⁴⁶⁾、また、SCs がインド平均の 16.6% よりもはるかに高い 31.9% にも上ることである。経済的にはパンジャブ州は 1960 年代の「緑の革命」の成功もあり、インドのなかでも豊かな州である。州政治としては、1980 年代にはシク教徒と、インディラ・ガンディーが首相として政権を担っていた会議派とのあいだで、血を流した苦い争いを経験している。政党政治は、シク教徒が支持してきた地域政党アカリー・ダルと会議派の 2 政党を中心として動いてきた。BJP は長くアカリー・ダルのパートナーとして定着し、両政党による連合は 2007 年より州政権を担っている。

ただし政権与党である BJP と、とりわけアカリー・ダルに対する州民の昨今の風当たりは強く、汚職や治安面での問題、さらには麻薬の蔓延など、日々の不満が有権者のあいだで蓄積している。パンジャブ州での麻薬等の違法薬物の広まりは失業や農業問題にも関連していて、農村では電力無償などの優遇措置が取られていても、供給が夜間あるいは時間に制限があるなど決して勝手のよいものではないという。また労務コストやディーゼル価格、医療費や教育費用の上昇も農村の人々の生活を苦しめている。他方、都市部でも電力価格や税負担に関する不満や、伝統的な工業都市のルディアナおよび近郊都市を襲った鉄鋼関連企業の経営不振などが政権与党に重くのしかかることになった(*The Hindu*, April 23, 2014)。ただし、パンジャブ州にも全国的にみられるモディ人気は届いており、この点は BJP にとっては救いであったといえる。そのようななか、選挙で大きなインパクトを残したのが全選挙区で候補者を擁立した庶民党である。庶民党は党首アルヴィンド・ケジュリワルが 2013 年 12 月末にデリーの州首相に就任してほどなく、1984 年のシク教徒をめぐる暴動の責任の所在を明らかにすべく、特別調査チームの立ち上げを発表している。パンジャブ州ではこうして庶民党への人気が高まり、とりわけ若い人たちのあいだに受け入れられていった(*The Hindu*, April 23, 2014)。

今回の連邦下院選挙では、アカリー・ダルと BJP 連合は前回 2009 年と同じく、前者アカリー・ダルが 10 選挙区で、後者 BJP が 3 選挙区で候補者を擁立している。会議派は 13 選挙区すべてで候補者を送り出した。そのなかで、アムリトサル選挙区では BJP の上院議員でもあるアルン・ジャイトリーが立候補したのに対して、会議派は前州首相のアマリンドール・シンを擁立し、大物政治家対決の構図がつくり出された。またバーティンダ選挙区では、アカリー・ダルの現職のプラカシュ・シン・バダル州首相

の義娘であるハルシムラート・カウル・バダルと、会議派から立候補した彼女の夫の親戚であるマンプリート・シン・バダルが対峙した。投票日は全 13 選挙区とも 4 月 30 日で、選挙戦ではいつものごとく、買収目的でアルコールや麻薬が飛び交っていたという。また州役人によるアカリー・ダル、BJP 連合への投票を求めるあからさまな選挙違反行動や、他候補者に対する私的確執の持ち込み、罵り・非難も茶飯事であった⁽¹⁷⁾。

こうして行われたパンジャブ州の連邦下院選挙の結果をまとめたのが表 4.3 である。国政選挙に初めて臨んだ庶民党は 24.4% の得票率で、13 議席中 4 議席獲得と大きく躍進している。ちなみに庶民党はこのパンジャブ州のみでしか議席を得ることができなかった。他方、2009 年の下院選挙では議席数を 2 から 8 に大幅に増やした会議派は今回、得票率は 33.7% で庶民党を上回ったものの、獲得議席数は庶民党より少なく、3 議席に大きく減らす大敗であった。アカリー・ダルは 4 議席を維持したが、得票率は 33.9% から 26.3% に減じている。BJP も得票率を 10.1% から 8.7% と若干落としたものの、議席数はひとつ増やして 2 議席を得ている。結果としてアカリー・ダルと BJP 連合は 6 議席を確保したが、BJP/NDA の大勝利であった今回の第 16 次連邦下院選挙において、パンジャブ州では大苦戦を強いられた。なお、投票率はインド平均よりも高く、また前回の 69.8% をわずかに上回る 70.6% であった。

BJP 連合の苦戦は、アルン・ジャイトリーがアマリンダール・シンに 10 万票以上の差で敗れたことにも表れている。ジャイトリーはいうまでもなく BJP を代表する「顔」のひとりであり、実際、BJP の選挙マニフェストの表紙にもモディ、ヴァジュペーイーやアドヴァーニ、ラージナート・シンといった面々に交じってジャイトリーの写真が掲載されている(Bharatiya Janata Party 2014)。ジャイトリーは上院議員として、現職の財務大臣および防衛大臣という要職を兼務するが、ジャイトリーの落選を受けて、州議会で同じくアムリトサル選挙区選出およびパンジャブ州 BJP 代表かつ州政府の地方行政・医療教育研究大臣のアニル・ジョシが、責任をとって直ちに大臣職を辞す旨を発表した(*The Hindu*, May 17, 2014)⁽¹⁸⁾。ただしジャイトリーの敗北は、BJP の敗北というより、州政権・選挙で手を組むアカリー・ダルの不人気に大きな原因があると考えられる(*The Hindu*, May 27, 2014)。州政権を担うアカリー・ダルに対する有権者の目は厳しく、今後の政権運営動向によっては同党と BJP との関係にも変化が生ずることになるかもしれない。なおバーティンダ選挙区では、BJP のハルシムラート・カウル・バダルが 2 万票弱の差で会議派マンプリート・シン・バダルを破っている。

表 4.3 パンジャブ州の連邦下院総選挙の結果

政党名	第16回連邦下院選挙(2014年)		第15回連邦下院選挙(2009年)		第14回連邦下院選挙(2004年)	
	議席数	得票率(%)	議席数	得票率(%)	議席数	得票率(%)
インド人民党(BJP)	2	8.7%	1	10.1%	3	10.5%
国民会議派	3	33.1%	8	45.2%	2	34.2%
庶民党(AAP)	4	24.4%	-	-	-	-
アカリー・ダル	4	26.3%	4	33.9%	8	34.3%
多数者社会党	0	1.9%	0	5.8%	0	7.7%
無所属	0	3.6%	0	2.3%	0	2.8%

(出所) 表 4.1 に同じ。

庶民党の躍進について、同党は年齢層、社会階層、カースト、地域、コミュニティーのどれをとっても、選挙前の予想よりも広く健闘している。OBCs のあいだでは 10 人にひとりの有権者が庶民党に投じ、

上位カースト、若年層、大卒そして都市部有権者からの支持もまんべんなく得ている。また、議席を獲得した 4 選挙区はいずれもマルワ地方にある。庶民党が有権者への情動的な訴えに成功した点は間違いないとして、重要なのは、貧困層・SCs 有権者が、アカリー・ダルを中心とする現政権に失望と無力感を感じ、その受け皿を提供したのが庶民党であったという点であろう(Singh 2014; *The Hindu*, May 20, 2014)。他方、選挙区ごとの検討によれば、庶民党は 6 選挙区で会議派への票を、2 選挙区でアカリー・ダルと BJP 連合の票を侵食している(Singh 2014)。つまり中央レベルでの会議派・UPA 政権への不満と、州レベルでのアカリー・ダルと BJP 連合政権への不満が、庶民党の躍進の背景にある。蔓延する麻薬、農村での農民の自殺、物価上昇、汚職、失業など、パンジャブ州の有権者はさまざまな問題に不満を抱いていたことはすでに述べたとおりである(*The Hindu*, May 20, 2014)。SCs の支持を基礎票としてきた多数者社会党は今回も議席獲得はならなかったばかりか、得票率は前回の 5.8%から 1.9%と大幅に減らし、みる影もない。SCs の支持を得たのは庶民党である⁽¹⁹⁾。

なお、前節のマハーラーシュトラ州とは異なり、パンジャブ州では各選挙区ともに上位 2 者あるいは 3 者で票が割れ、過半数の得票当選を勝ち取ったものは皆無であった。従来のアカリー・ダルと BJP 連合とそれに対する会議派という 2 軸対立から、庶民党という新たな選択肢が増え、乱戦の様相を呈したのがパンジャブ州の第 16 次連邦下院選挙であった。

4. ラージャスターン州：BJP が全議席獲得——「ミッション 25」の完遂——

1980 年代以降のラージャスターン州の政党政治は、BJP 対会議派という 2 陣営による対立構図を基本としている。本節でみたなかではマハーラーシュトラ州に近いが、ラージャスターン州は同州と異なり、両党いずれも同盟を組まずに選挙を戦い、また州レベルでは単独で政権を担っている。州政権は 1998 年 12 月～2003 年 12 月は会議派(州首相は同党アショーク・ゲーロート)、2003 年 12 月～2008 年 12 月は BJP(同 BJP ヴァスンダラ・ラージェー)が与党で、2008 年 12 月の州議会選挙では会議派が勝利を収めてアショーク・ゲーロートが首相に返り咲いている。しかし連邦下院選挙直近の 2013 年 12 月の州議会選挙では、当時すでに吹き荒れていたモディ旋風の影響で BJP が 200 議席中 163 議席を押さえるという圧勝で、ヴァスンダラ・ラージェーが再び州首相に就任した⁽²⁰⁾。州議会選挙ではこのように BJP と会議派が交互に勝利を収めているが、連邦下院選挙については、1999 年と 2004 年では連続して BJP が、2009 年は会議派が勝利を収めている。2004 年と 2009 年の選挙ではそれぞれの勝者である BJP と会議派が 20 議席以上を押さえる圧勝であった(後掲表 4.4 参照)。今回の下院総選挙では直近の州議会選挙を大差で制した BJP が、勢いそのままに選挙戦に突入している。ラージャスターン州 BJP の選挙運動を切り盛りするラージェーは、全 25 議席での BJP の擁立候補の当選をめざす「ミッション 25 キャンペーン」を掲げ、強力に推進した。他方、会議派はこれまでの会議派・UPA 政権の成果や、対立するモディ・BJP に対する過大評価を有権者に訴えたが、会議派への反応は芳しくなかったと報じられている(*The Hindu*, April 23, 2014)。

今回の下院選挙で BJP の候補者擁立にあたって注目を浴びたのが、過去に連邦政府大臣職を務めたベテラン政治家であるジャスワント・シンを党公認から外したことである。ジャスワント・シンは今回の下院選挙での立候補を政治家キャリア最後の出馬と位置づけていたが、代わりに党公認候補者としてバルメール選挙区から擁立されたのは、直前まで会議派に所属し BJP に党籍を鞍替えしたソナラム・チョ

ウダリー(以下ソナラムとする)であった。ソナラムは1996～2004年のあいだ、会議派選出の連邦下院議員で、2008～2013年には同州議会議員を務めたのち、2013年末の州議会選挙で落選している。長きにわたって会議派の一員であったソナラムはその後、ゲーロート批判を展開していた。このジャスワント・シン外しとソナラム公認にはラージャスターン州 BJP 党員のなかでも反対があったが、この決定には、政策をめぐりシンとは意見のちがう現職州首相のラージェーの意向も働いている。ジャスワント・シンは結局、同選挙区から無所属で出馬することを表明し、BJP より 2 度目の党籍はく奪処分となった⁽²¹⁾。またシカール選挙区でも、1998年から同地区選出で連邦下院議員を3期務め、その間国務大臣にもなったことのあるスパーシュ・マハリアが BJP の公認を外され、無所属で出馬した⁽²²⁾。

ラージャスターン州の連邦下院選挙は4月17日に20選挙区で、翌週の24日に5選挙区で2回に分けて行われた。選挙運動中にはソナラム陣営の選挙運動車が何者かに襲撃され(ソナラム側はジャスワント・シン陣営によるものと非難)(DNA, April 11, 2014), またジャスワント・シン陣営は投票時にソナラムに肩入れするような州政府による不正があったと抗議を申し入れた。波乱含みのバルメールでは結局、「技術的な問題」(インド選挙委員会)を理由に、同選挙区の一部で再投票が実施されることとなった(DNA, April 11, 2014)。BJP と会議派も、お互い激しくやりあっている(DNA, April 21, 2014)。こうして行われたラージャスターン州の連邦下院選挙の投票率は63.1%で全国平均66.4%を下回ったが、2009年第15次下院選挙の投票率48.4%から大幅に上昇している。

表4.4はその選挙結果である。BJP は得票率54.9%で25議席すべてを押さえ、ラージェーが主導した「ミッション25」を完遂した。ジャスワント・シンは次点ではあったがソナラムに8万7000票以上の差で(得票率はソナラム40.1%対シン32.9%), またマハリアも BJP 公認で当選を果たしたスメダーナンド・サラスワティの足元にも及ばない第3位(得票差31万票以上, 得票率はわずか17.7%)で敗れ去っている。アジメール選挙区では、2013年末の州議会選挙惨敗後に弱冠36歳で会議派ラージャスターン州のトップに就任した、最年少の下院議員でもあったサチン・パイロットが BJP のサンワルラル・ジャートに17万票の差で敗北した(得票率は40.3%対55.2%)。ラージャスターン州の連邦下院選挙でひとつの政党が全25議席を独占したのは1984年に会議派が成し遂げて以来だが、これはインディラ・ガンディー元首相暗殺で同情票が集まったことによる。25議席中7議席で当選者の得票率が過半数を下回り「完封」とはいかなかったが、同州下院選挙史上まれにみる大勝利を BJP が挙げたことは間違いない。

表4.4 ラージャスターン州の連邦下院総選挙の結果

政党名	第16回連邦下院選挙(2014年)		第15回連邦下院選挙(2009年)		第14回連邦下院選挙(2004年)	
	議席数	得票率(%)	議席数	得票率(%)	議席数	得票率(%)
インド人民党(BJP)	25	54.9%	4	36.6%	21	49.0%
国民会議派	0	30.4%	20	47.2%	4	41.4%

(出所) 表4.1に同じ。

本選挙結果をもたらしたのはパイロットの敗戦の弁にあるごとく「会議派・UPA 政権に対する不信任、モディへの期待」(The Hindu, May 17, 2014)である。出口調査では物価上昇, 汚職, 失業, 飲料水の供給不足, そして女性の安全に有権者の多くが関心をもち、この観点で、半数近くが次の政権与党の最適な選択として BJP を挙げている(The Hindu, May 17, 2014)。モディが首相候補であったことは要因とし

て大きく、伝統的にはブラーマンやラージプート、商人層といった留保枠に入らない社会グループが BJP の同州の支持基盤であるなかで、今回の選挙で BJP は後進階級、SCs、部族、そしてヒンドゥー至上主義者の標的となりやすいムスリムからすらも支持を集めた。初投票となる若年層からの得票も大きい (*The Hindu*, May 28, 2014)⁽²³⁾。これがラージャスターン州における本下院選挙での BJP の大勝利の背景である (*The Hindu*, May 25, 2014)。

[注]

- (1) 本節の記述は 2014 年 7 月 30 日現在のものである。本連邦下院選挙の選挙結果は、インド選挙委員会ウェブサイトにて主として 2014 年 5 月 17 日付掲載のものを用いている。また近藤則夫氏より関連資料のご教示をいただいた。パンジャブ州は北部州に位置づけられることがあるが、本節では西部州として扱う。過去の選挙結果は広瀬 (2001), 広瀬・南埜・井上 (2006), 広瀬・北川・三輪 (2011) に依拠している。
- (2) 本節では過去・直近の州議会選挙の得票率や獲得議席との比較は行わない。ただしこのことはもちろん、Chidambaram (2014) が述べるように州議会選挙の結果を受けて行われている州の政治状況に意味がないということではない。
- (3) グジャラート州はモディが州首相になる前の 1990 年代も年率 8.3% の経済成長を記録している。
- (4) KHAM(カーム)とはクシャトリヤ、ハリジャン(SCs), アディヴァーシー(部族), そしてムスリムの頭文字で、KHAM 戦略はグジャラート州で 4 回州首相になった会議派のマダーヴシン・ソランキが提起したものである。
- (5) 代替りの公認候補もブラーマンではあるが、ムンバイを拠点とすることから部外者とみられているという (*The Hindu*, March 28, 2014, 2014 年 3 月 28 日アクセス)。
- (6) SCs および STs の人口比は 2011 年人口センサス、宗教別人口構成比は 2001 年センサスによるものである。以下の州についても同様。
- (7) <http://www.thehindu.com/opinion/op-ed/higher-turnout-in-youth-vote/article6054236.ece>(2014 年 7 月 30 日アクセス)。
- (8) <http://www.thehindu.com/opinion/op-ed/obc-support-for-bjp-signals-the-end-of-caste-politics/article6070387.ece> (2014 年 7 月 30 日アクセス)。
- (9) <http://www.thehindu.com/opinion/op-ed/the-story-of-dalit-vote-between-the-bjp-and-the-bsp/article6090744.ece> (2014 年 7 月 30 日アクセス)。
- (10) <http://www.thehindu.com/opinion/op-ed/voting-patterns-among-scheduled-tribes/article6100768.ece> (2014 年 7 月 30 日アクセス)。
- (11) *Frontline*, May 30, 2014, “Violations galore”.
- (12) *Frontline*, May 30, 2014, “Challenge to Democracy”.
- (13) 自愛党と自愛農民組合のいずれも、ラジュ・シェティが創設者である。
- (14) 注 7~9 参照。
- (15) うちヒンゴリとライガドの 2 選挙区では、当選者と時点の得票率の差はわずか 0.2%ポイントであった。そして、チャヴァンと並ぶ会議派からのもう 1 人の当選者ラジーヴ・シャンカールラオ・サタヴがシヴ・セナーのワンケデ・スパーシュバプラオに争い勝ったのが、前者のヒンゴリ選挙区である(得票率は 44.5%対 44.3%)。
- (16) 2001 年人口センサスではシク教徒 59.9%, ヒンドゥー教徒 36.9%, ムスリム 1.6%である。
- (17) *Frontline*, May 30, 2014, “Violations galore”.
- (18) その後、BJP 所属のアルン・ジョシを含む州政府大臣 4 人が全員、辞職の意思を表明している (*The Hindu*, June 25, 2014)。
- (19) 注 8~9 参照。
- (20) ラージェー自身も州議会選挙でのこれほどまでの大勝利に驚きを隠さなかった (*The Hindu*, April 23, 2014)。ラーजेーは選挙戦でしきりにモディに言及したという。
- (21) 1 度目は Singh (2009) を出版した 2009 年。ただしその後 2010 年には復党している。

-
- (22) この公認外しに対してもマハリアを支持する党員から抗議の声が上がっている(*Hindustan Times*, March 21, 2014)。ちなみに 2003～2008 年の州首相を務めたラージェー政権に対しては専制的との批判がたびたびなされていた(小西 2011)。
- (23) ラージヤスターン州ではヒンドゥー教徒が 9 割近くを占める一方、ムスリムは 1 割に満たない(2001 年)。SCs の比率は全国平均 16.6%とさほど変わらない 17.8%であるが、STs は同 8.6%よりも高い 13.5%を占める(2011 年)。

[参考文献]

<日本語文献>

- 小川道大 2011. 「1. マハーラーシュトラ州：会議派の躍進と再建マハーラーシュトラ・セナーの台頭」 広瀬崇子・北川将之・三輪博樹編『インド民主主義の発展と現実』勁草書房 218-223.
- 小西公大 2011. 「3. ラージヤスターン州：州民の選挙行動にみる振り子運動」 広瀬崇子・北川将之・三輪博樹編『インド民主主義の発展と現実』勁草書房 229-233.
- 広瀬崇子編 2001. 『10億人の民主主義：インド全州，全政党の解剖と第13回連邦下院選挙』御茶の水書房.
- 広瀬崇子・南埜猛・井上恭子編 2006. 『インド民主主義の変容』明石書店.
- 広瀬崇子・北川将之・三輪博樹編 2011. 『インド民主主義の発展と現実』勁草書房.

<外国語文献>

- Bharatiya Janata Party. 2014. *Ek Bharat Shreshtha Bharat, Sabka Saath Sabka Vikas : Election Manifesto 2014*. New Delhi: BJP.
- Chidambaram, Soundarya. 2014. "Play in the States: the Indian Voter's 2014 Mandate." *Economic and Political Weekly* 49 (30) July 26: 22-24.
- Sood, Atul. 2012. *Poverty Amidst Prosperity: Essays on The Trajectory of Development in Gujarat*. Delhi: Aakar Books.
- Rani, Ruchika. 2012. "Dynamics of Growth in Gujarat" In *Poverty Amidst Prosperity: Essays on The Trajectory of Development in Gujarat*, edited by Atul Sood. Delhi: Aakar Books, 39 – 44.
- Singh, Jaswant. 2010. *Jinnah: India, Partition, Independence*. New Delhi: Oxford University Press India.
- Singh, Surinder. 2014. "AAP in Punjab: Exploring the Verdict." *Economic and Political Weekly* 49 (29) July 19: 26-27.

<その他>

- 選挙委員会ウェブサイト (<http://eciresults.nic.in/PartyWiseResultS06.htm?st=S06> 2014年5月27日アクセス).

日刊紙・雑誌

- The Hindu (<http://www.thehindu.com/>)
- Hindustan Times (<http://www.hindustantimes.com/>)
- DNA (<http://www.dnaindia.com/>)
- Frontline*, May 30, 2014.